

レポーター：学芸員の末吉さんです。よろしくお願いします。

学芸員：よろしくお願いします。

レポーター：この仏壇ほんとに色が鮮やかでびっくりしたんですけど、どこの国の仏壇  
なんですか。

学芸員：これはですね、チベットの仏壇とそれからお寺の内部を再現したものなんです  
ね。

レポーター：チベットですか。日本の仏壇と全然違いますよね。

学芸員：そうですね、派手ですね。

レポーター：赤とかオレンジ、緑、青、華やかですよ。

学芸員：そうですね。私達の感覚ですとやっぱり日本のお寺だとこんな感じではありま  
せんので、びっくりすると思いますね。

レポーター：しかもびっくりしたのが、楽器がたくさんありますよね。

学芸員：そうですね。チベットのお寺では、お坊さんがお経を読みながらですね、その  
合間にいろんな楽器を使って音を出します。太鼓とかですねラッパとかシンバルです  
ね。

レポーター：シンバルやラッパを鳴らすんですか。お経の途中に。

学芸員：はい、途中で。やりますね。

レポーター：しかもラッパすっごく大きいじゃないですか。

学芸員：はい。

レポーター：けっこう大きい音がでるんじゃないですか。

学芸員：そうですね。いろんな種類のラッパがあるんですけども、そちらにありますド  
ウンチェンっていう大きなラッパは一年に一回あるような大きな法要で村中に響くよ  
うな音を出してですね、これから法要が開かれますよっということを知らせるため  
に用いる楽器なんですね。

レポーター：そしてですね、見たことのない形の楽器があるんですけども。あれは。

学芸員：そうですね。これはダマルっていう太鼓。デンデン太鼓ですね。

レポーター：ほんとですね。日本にも。

学芸員：これはデンデン太鼓なんですけども、あの実はこの部分がですね、人間の頭が  
い骨で作られている。

レポーター：ここですか。頭がい骨なんですか。

学芸員：ひび割れが見えますかね。

レポーター：はい。

学芸員：人間の頭がい骨のてっぺんを2つ合わせて作ったダマル太鼓ですね。これは。

レポーター：初めて見ました。しかもこんなにいい音がするんですね。

学芸員：まあ、いい音かどうかは聞く人それぞれだと思いますけれども、チベットでは

やっぱりこういう日本では普通考えられない素材を使ってですね、楽器を作ったりするんですね。

レポーター：こちらにも人間の骨ですか、それらしき笛でしょうか。

学芸員：まあこれは袋に入っていますが、人間の大腿骨ですね。足の骨で作ったまあ笛ですね。はい。これをまあお坊さんが吹いて、で死者を供養するために使うという風にいられています。

レポーター：え、ここから口に当てて。

学芸員：はい、そうですね。これもチベット特有のお坊さんが使う特殊な楽器ですね。びっくりしますよね。

レポーター：はい。初めて見ました。色も違うし、楽器を使ってお経と一緒に。文化が違うと全然違うんですね。

学芸員：そうですね。

レポーター：末吉さん、こちら立派な仏壇ですね。

学芸員：そうですね。これはチベットのお寺の仏壇でして、こういう風に箱型になってまして、真ん中にご本尊が設置されています。で周りにはお経が入れられているんですね。

レポーター：お経なんですか。

学芸員：はい、日本のお経とはちょっと違っていて、細長い紙に書いたお経をですね、ずっと何枚も何百枚もとじて、紐でくくったものですね。

レポーター：お経も日本と違って、色とりどりですよ。

学芸員：ぜんぜん違いますよね。ほんとに。で、ご本尊はですね、これはパドマサンババという半ば伝説上の人物なんですけども、チベットに初めて密教を伝えたお坊さんなんですね。はい。日本でいうと弘法大師空海みたいな、そんな方のお像ですね。

レポーター：目が大きくてギョロツとしてますね。

学芸員：この人はですね、非常にいろんな伝説があつてですね、もともとまあインドに生まれた人なんですけども、非常に厳しい修行を積んだ末に、チベットに入って、チベットの土着の神様達を調伏、調伏というのは、いろんな呪術的な力で従えるということなんですけども、それでまあチベットに仏教を広げていった。半ばそうですね超能力者みたいなものすごい力を持った人物といわれています。

レポーター：手には何を持ってるんですか。

学芸員：はい、右手には五鈷杵といわれる密教法具ですね。煩惱を打ち砕くといわれる密教の法具、日本にもあるんですけどね。で左手には、髑髏杯という髑髏で作ったお椀を持っているわけですね。どちらも密教法具ですね。はい。日本と違って、何から何までやっぱ強烈ですね。インパクトがありますね。両脇にはですね、インドにいたころの奥さんと、それからチベットに入ってから奥さんと二人両脇に立って、三尊

像を作っているんですね。

レポーター：え、奥様なんですか。

学芸員：チベットの仏教は日本と違ってですね、かなり密教化が進んでいる仏教でして、女性性をですね、肯定するんですね。なんか日本ではちょっと考えられませんが、人間の感覚、まあ性的な力も含めたそういった感覚の力をですね、すべて肯定して悟りを開こうとするそういう性格が強い宗教なんですね。ですから、女性の神様仏様というのがたくさんいるんですね。

レポーター：末吉さん、そしてこの仏壇の前にあるものはなんですか。

学芸員：これはですね、トルマというお供え物ですね。何か法要があるときにですね、信者さん達がお米の粉とそれからバターをねりねり混ぜてですね、こういったものを作るんですね。

レポーター：お米の粉とバターですか。なんかおいしそうですね。

学芸員：おいしそうですね。ですから、法要が終わった後、お下がりとして食べるそうですね。

レポーター：え、食べるんですね。

学芸員：はい。こういったものをたくさん作って、仏様に供えるというような意味があります。

レポーター：なんかお人形のようなものもありますね。

学芸員：そうですね。これもトルマの一種ですけども。手には何か持ってますけど、これはどうやらその心臓を意味しているようですね。要するにちょっとギョッとするんですけども、チベットでは自分の全身、ありとあらゆるものを捧げますということが尊い行為だとされてまして、そういう目に見える形としてそれを表したんですね。これは。

レポーター：末吉さん、これはどういった絵なんですか。

学芸員：はい、これは須弥山図という作品なんですけども、地球の姿を描いた絵なんです。

レポーター：地球なんですか。

学芸員：はい。これは古代のインド人が考えた地球の図でして。

レポーター：全然なんだか違いますよね。

学芸員：そうですね。

レポーター：球体じゃないんですね。

学芸員：はい、その当時は人口衛星もロケットもありませんから、当時の人達は必死で地球はこういう形をしてるんじゃないかという風に考えたんだと思うんですけど、こういう風にですね、お盆のような丸い平面があつてですね。

レポーター：平べったい。

学芸員：その上に海水があつて、いわゆる海ですね、ありまして、でその真ん中には須弥山という世界の中心にそびえるとんでもない高い山がある。でその上には帝釈天の宮殿があります。この部分ですね。でその四方ですね、東西南北には四天王が住んでる宮殿があつて、東西南北を守ってる。で帝釈天の宮殿の上にはさらに天上界がずっと連なっていて。

レポーター：広がってますね。

学芸員：そういう広大な世界といいますか、宇宙の広がりを表している図ですね。

レポーター：面白いですね。海水も青、ピンク、黄色、白と色が分かれているのにも意味があるんですか。

学芸員：そうですね。実はここでは描かれてませんけれども、このお盆の下には、いわゆる地盤の下にはですね、さらに、何層か構造があつてですね、それを色で分けて表しているというものです。

レポーター：海水になんだか島のようなものが浮かんでいますよね。

学芸員：そうですね。ここにあつたり、ここにあつたりしますけれども、でこれは人間が住んでいる大陸として描かれているんですけども。

レポーター：私達が住んでいる大陸。

学芸員：で、私達が住む世界はここ一番南の方にある大陸、南瞻部洲といいますけども、そういうところに古代のインドの人たちは住んでるという風に考えられていたわけですね。

レポーター：この丸いものは何ですか。左右に丸い。

学芸員：ここに、実はよく見るとわかるんですけど、ウサギが描かれていますよね。

レポーター：ほんとですね。耳の長いウサギです。

学芸員：ということは、これは月ですね。

レポーター：月。

学芸員：はい。こちらはちょっと宮殿が描かれているんですけど、太陽。

レポーター：太陽ですか。

学芸員：はい。この月と太陽が須弥山をぐるぐるぐるぐる回っている。

レポーター：面白いですね。

学芸員：そうですね。

レポーター：じゃあ、この中央の高い塔には。神様が。

学芸員：そうですね。神様が住んでいますし、そのさらに一番上までもずっと神様、天人の世界が続いていてですね、ちなみにあの有頂天という言葉がありますよね。

レポーター：はい、有頂天になる。

学芸員：はい、そうです。その有頂天というのは一番上の層の天界のこと。これを有頂天というそうです。はい。

レポーター：有頂天になるということは。

学芸員：これ以上上がない、という一番高い天界のことですね。

レポーター：その言葉はここからきてるんですか。

学芸員：はい。もう一つありまして、金輪際といいますよね。

レポーター：金輪際、はい。

学芸員：なにになにしないとといった、金輪際というのはこの丸い大陸の底のことを表しています。はい。これ以上ない底のことを金輪際というわけですね。意外と身近な言葉が出てきますよね。

レポーター：ほんとですね。私達が使っている言葉がこの図から読み取れる。

学芸員：そうですね。

レポーター：皆さんには是非実際足を運んでいただいて、見ていただきたいですね。

学芸員：そうですね。はい。